現代に生きる小酒井不木

蟹江町には、小酒井不木の足跡をたどることのできる場所がいくつもあります。
興味を持った方は、ぜひ足を運んでみてください。

フボクくん
※蟹江町出身の探偵小説家
小酒井不木を元にした
オリジナルキャラクターです。

蟹江町歴史民俗資料館

住所：愛知県海部郡蟹江町城一丁目 214 番地
電話：0567-95-3812

不木について知りたいなら、まずはココ。不木が実際に使っていた机や直筆原稿のほか、江戸川乱歩の書状や乱歩が文字を書いた「不木碑」など、不木と乱歩の交流を示す資料も展示しています。

小酒井不木資料室

不木碑

蟹江町図書館・小酒井不木生誕地碑

住所：愛知県海部郡蟹江町大字蟹江新田字札中地 101 番地 1

不木が書いた作品に興味があれば、蟹江町図書館で読むことができます。ただし、館内閲覧のみなのでご注意を。図書館の東側には不木の小学校の後輩にあたる黒川紀章揮毫（きごう）の「小酒井不木生誕地碑」が建てられています。（実際の生家跡は図書館から１kmあまり南です）

蟹江町図書館東側に立つ
「小酒井不木生誕地碑」

鹿島神社文学苑

住所：愛知県海部郡蟹江町大字蟹江新田字鹿島

この鹿島神社文学苑には、蟹江の水郷風景を詠んだ２６の句碑が建てられています。そのなかには不木の「いつとんで来たか机に黄の一葉」の句碑もあります。

アクセス
（「蟹江町歴史民俗資料館」まで）
※近隣詳細は地図でご確認ください。

公共交通機関の場合
名古屋駅から 近鉄名古屋線「近鉄蟹江駅」（約10分）下車　徒歩約15分
名古屋駅から JR関西本線「蟹江駅」（約10分）下車　徒歩約10分

自動車の場合
東名阪自動車道「蟹江IC」から車で約7分

制作：愛知県蟹江町　2021.1

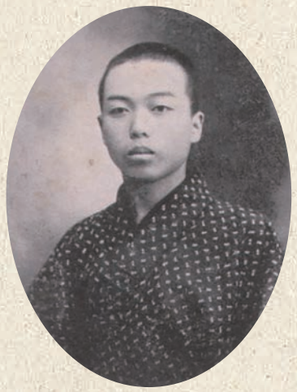
蟹江町出身の探偵小説家
小酒井不木をご存知ですか？

小酒井不木（こさかいふぼく）は、大正末期から昭和初期のまだ黎明期にあった探偵小説の世界で活躍した人物です。医学博士でもあり、科学的な知識を活かして多くの作品を残しただけでなく、江戸川乱歩を始めとした多くの作家たちと交流し、探偵小説の世界を盛り立てました。
また、俳句にも情熱を注ぎ、今も活動が続く「ねんげ句会」の発起人でもあります。

小酒井不木の生涯

少年時代 ～医学者をめざして～

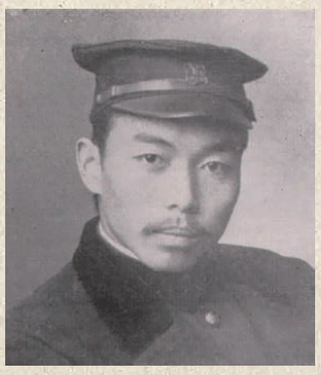
小酒井不木は、明治２３年（１８９０）１０月８日、愛知県海東郡新蟹江村（現・海部郡蟹江町）の地主小酒井半兵衛（のちの村長）の長男として生まれました。本名は光次（みつじ）といい、地元では「みっさま」と呼ばれ、大人を相手に「地獄極楽物語」を創作し説法するなど、後の作家としての才能を発揮していたそうです。新蟹江尋常小学校、蟹江高等小学校、愛知一中、京都の旧制三高を卒業し、東京帝国大学医学部へ入学、その後大学院に進んで生理学・血清学を専攻しました。


愛知一中時代

青年時代 ～医学と病、そして文学の道～

大正４年（１９１５）、２５歳で海部郡神守村（現・津島市神守町）の地主鶴見楽太郎の娘久枝と結婚。その年東北大学助教授を拝命、大正６年には衛生学研究のためにアメリカやヨーロッパへ留学しました。しかし、持病の結核の悪化により大正９年、志半ばで帰国することになり、妻の郷里で療養しながら文筆活動を開始します。留学中にアメリカのエドガー・アラン・ポーやイギリスのコナン・ドイルらの作品に接して探偵小説に傾倒していった不木は、医学に関する随筆を執筆するだけでなく、「新青年」などの雑誌で欧米の探偵小説を紹介しました。また、医者と病人との両方の立場から書いた『闘病術』は再販を重ね大ベストセラーになりました。

京都三高時代


東京帝大時代

小説家時代 ～江戸川乱歩との出会いから探偵小説作家へ～

大正１１年、江戸川乱歩が「新青年」に応募した作品「二銭銅貨」について、編集長の森下雨村から欧米の翻訳物ではないかと相談があり、作品に接した不木はこれを絶賛し推薦文を書いたことで、乱歩との交流が始まりました。まだ本格的な探偵小説家が誕生していない中、乱歩に探偵小説で生計を立てることを勧めたのも不木でした。大正１２年に不木は名古屋市中区御器所町（現・名古屋市昭和区鶴舞四丁目）に自宅を新築して本格的な文筆生活に入り、大正１３年からは小酒井不木のペンネームを使用、その後乱歩の強い勧めをうけ本格的に探偵小説の創作を行うようになりました。
不木は、医学の知識を生かした「人工心臓」や、名古屋を舞台とした「疑問の黒枠」、蟹江町が舞台の「通夜の人々」のほか、少年探偵が活躍する「紅色ダイヤ」など多くの作品を発表しました。また、当時まだ黎明期にあった探偵小説の世界を盛り上げようと多くの作家と交流しました。昭和２年（１９２７）には「竜門党異聞（りゅうもんとういぶん）」が帝国劇場で上演され、横溝正史らの作家仲間にも刺激を与えました。同年、乱歩ら新進作家と合作組合「耽綺社（たんきしゃ）」を結成し、新たな取り組みも行いました。
しかし、昭和４年４月１日、急性肺炎により志半ばで急逝、３８歳の若さでした。人気作家の突然の死は新聞や雑誌に取り上げられ、交流のあった作家たちも不木の自宅へ駆けつけその死を惜しみました。すぐに江戸川乱歩や弟子の岡戸武平らが遺作を集め編集を開始、翌年には全１７巻におよぶ「小酒井不木全集」の発刊に至り、今に残されています。

新築当時の不木邸（名古屋市内）

▲大正15年名古屋ホテルに於いて（左から本田緒生、江戸川乱歩、小酒井不木、国枝史郎、川口太郎）

◀大正6年12月　留学記念写真（不木は前列右から３人目）